

『その言葉を聞きますか』 ヨハネ8:48-59

- 8:48 ユダヤ人たちはイエスに答えて言った、「あなたはサマリヤ人で、悪霊に取りつかれていると、わたしたちが言うのは、当然ではないか」。
- 8:49 イエスは答えられた、「わたしは、悪霊に取りつかれているのではなくて、わたしの父を重んじているのだが、あなたがたはわたしを軽んじている。
- 8:50 わたしは自分の栄光を求めてはいない。それを求めるかたが別にある。そのかたは、またさばくかたである。
- 8:51 よくよく言うておく。もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう」。
- 8:52 ユダヤ人たちが言った、「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今わかった。アブラハムは死に、預言者たちも死んでいる。それなのに、あなたは、わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろうと、言われる。
- 8:53 あなたは、わたしたちの父アブラハムより偉いのだろうか。彼も死に、預言者たちも死んだではないか。あなたは、いったい、自分をだれと思っているのか」。
- 8:54 イエスは答えられた、「わたしがもし自分に栄光を帰するなら、わたしの栄光は、むなしきものである。わたしに栄光を与えるかたは、わたしの父であって、あなたがたが自分の神だと言っているのは、そのかたのことである。
- 8:55 あなたがたはその神を知っていないが、わたしは知っている。もしわたしが神を知らないと言うならば、あなたがたと同じような偽り者であろう。しかし、わたしはそのかたを知り、その御言を守っている。
- 8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいて、そしてそれを見て喜んだ」。
- 8:57 そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたはまだ五十にもならないのに、アブラハムを見たのか」。
- 8:58 イエスは彼らに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである」。
- 8:59 そこで彼らは石をとって、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。

●序論

日本人には特別な聴力があると言われます。

たとえば虫の音という者を巡って、日本人はそれを「虫の声」という風にそこに風情や情緒、季節感を感じる「声」と理解するのに対して、他の多くの国の人たちは、それを雑音としか聞こえないということです。

同じ耳を持ちながら、文化の違い、そこで育った聴き取り方の違いで、情緒を感じるか、単に雑音としか聞こえないか、ということがあるんですね。

ところで、「同じ耳をもちながら…」というところで、ここには、霊的な感受性と信仰によって、イエスさまの言葉を、神の子救い主の言葉として聞きいる人であるか、それを自分たちにとって我慢のならない言葉としか聞こえない人であるか…が問われています。

す。

8:37 …それなのに、あなたがたはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉が、あなたがたのうちに根をおろしていないからである。

しかし、そんな人も変えられるそれは、キリストに結ばれて新しくされることでした。

2コリント5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。

●本論

I. 命をめぐる言葉として

8:51 よくよく言うておく。もし人がわたしの言葉を守るならば、その人はいつまでも死を見ることがないであろう」。

「その人はいつまでも死を見ない」という言葉にユダヤ人たちは反応しました。

8:52 …「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今わかった。アブラハムは死に、預言者たちも死んでいる。それなのに、あなたは、わたしの言葉を守る者はいつまでも死を味わうことがないであろうと、言われる。

8:53 あなたは、わたしたちの父アブラハムより偉いのだろうか。彼も死に、預言者たちも死んだではないか。あなたは、いったい、自分をだれと思っているのか」。

これまで、教師ニコデモやスカルの井戸のそばでのサマリヤの女性との対話でも同様でしたが、イエスさまの言葉を、信仰による霊的脳で聞き取ることができず、受け入れられない雑音としてしか処理できていない様子がわかります。

つまり、イエスさまが言われた「死」という言葉は、肉体的な死のことを超えて、霊的な死、つまり神さまとの関係の断絶と共に、来たるべき裁きの日のあとにある永遠の滅びを指し示します。

イエスを救い主と信じて、神からの救いを受け取る人は、この死そのものから、そして死の恐れから解放されるということをイエスさまは語られたのです。

有名な聖書の中の聖書と呼ばれる言葉はこのことをはっきり述べています。

3:16 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

イエスさまを通して、わたしたちはこの滅びからの救い、永遠の命の喜びと安心を「見る」ことができるのです。

II. 神に目を向ける言葉として

8:49 イエスは答えられた、「わたしは、悪霊に取りつかれているのではなくて、わたしの父を重んじているのだが、あなたがたはわたしを軽んじている。

8:50 わたしは自分の栄光を求めてはいない。それを求めるかたが別にある。そのかたは、またさばくかたである。

イエスさまはこれまでの対話の中でも、そして今日お読みしているところでも、繰り返し、御自分を遣わされた父なる神さまの姿をあらわそうとしておられます。

しかし、そのような証言がむしろユダヤ人たちには、イエスが悪霊に取りつかれているように聞こえるという皮肉な応答となっていたのです。

そして彼らは、自分たちの父祖アブラハムの名を持ち出して自分たちを上げ、イエスを引き下ろして理解しようとしています。

8:53 あなたは、わたしたちの父アブラハムより偉いのだろうか。彼も死に、預言者たちも死んだではないか。あなたは、いったい、自分をだれと思っているのか」。

民族的誇りによって、目の前に神から遣わされたイエス・キリストのことばが雑音にしか聞こえないという霊的破綻、霊的盲目状態は、悲しむべきことです。

ここに罪のありさまがあります。

どんなに良いと評価されるものであっても、それが神さまご自身から目をそらさせる…わたしたちにとって、それはもしかしたら努力と経験によって評価を受けて得た、地位や権力や立場、また能力や財産かもしれません。

聖書は、初めから、神おひとりがわたしたちの命と存在に価値を与えて下さるお方であることを語りだしています。

だれもが経験するかもしれないそのような挫折や悩みの中でも、この人生の真ん中に神を迎えているならば、キリストを通して示された神の愛の確信が深められているのであれば、わたしたちはそのすべての人生のありさまを神からの贈り物として、神さまに期待し、また導かれて生き抜くことができるのです。

イエスさまは、そういう信仰の模範でした。イエスさまはこう言われました。

8:54 イエスは答えられた、「わたしがもし自分に栄光を帰するなら、わたしの栄光は、むなしいものである。わたしに栄光を与えるかたは、わたしの父であって、あなたがたが自分の神だと言っているのは、そのかたのことである。

イエスさまは、人となってこの地上に来られて、この地上を徹底してへりくだって生き抜かれたその中心には、神さまご自身との関係の中に自分を見ていたからでした。

8:55 あなたがたはその神を知っていないが、わたしは知っている。もしわたしが神を知らないと言うならば、あなたがたと同じような偽り者であろう。しかし、わたしはそのかたを知り、その御言を守っている。

Ⅲ. キリストを経験する言葉として

イエスさまの言葉を聞き入れようとはしない彼らに、アブラハムこそわたしが今遣わされたこの日を喜んでいるとイエスさまは伝えました。

8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいました。そしてそれを見て喜んだ」。

しかし、それはまた彼らの耳には、聞き取ることのできない言葉であり、

8:57 そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたはまだ五十にもならないのに、アブラハムを見たのか」。

それに対して、イエスさまはご自身を証しされます。

8:58 イエスは彼らに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである」。

イエスさまは、アブラハム以上のもの、いや神御自身であることを示す言葉です。しかし、それはユダヤ人たちの耳と心の殺意に火をつけるきっかけとなり、ついには石でイエスさまを打ち殺そうということにまでなっていた様子があります。

自分を正当化するために、いかにキリストを貶めるか…、そういうゆがんだ思いが、ジクジクと膿が溜まるかのように、そこに生み出されていくのです。

ここで申し上げます。キリストは、人の罪が生み出すこのすべての憎しみや敵意を明らかにしたうえで、そのすべてを受けて十字架で死んでくださったのです。

そうしてすべての罪があきらかにされて、あの人もこの人もダメということが明らかになって終わりということがここにあるイエスさまが目指すところではありません。

その明らかになった罪がゆえに、わたしは十字架でその罪を背負うと十字架に進まれた方、それがイエス・キリストであるということです。

のちのパウロは、自分自身の救いの経験としてこう表現しています。

5:8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。

キリストの十字架の死の苦しみに神の愛が示されているとあるのです。

○さいごに

今、クリスチャンになったわたしたちはキリストの声を聞いて、その言葉を通して慰めを受け取ることができる。そして癒しや励まし、そして命と希望を経験することができます。

かつて迫害者であったパウロもそれを経験した人の一人でした。

1コリント15:9-10

15:9 実際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であって、使徒と呼ばれる値うちのない者である。

15:10 しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜った神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしとにあった神の恵みである。

今わたしたちにはこの神の恵みのもとにあります。この恵みを経験し、又押し出されてそれぞれのところで、聞消えたことの感動を証しすることができれば感謝です。